

# オノマトペを表現する文字種を選択要因

## The Selection of Hiragana and Katakana on Onomatopoeia

—「キンキン」と「ふわふわ」をめぐる—

Focusing on *Kinkin* and *Fuwafuwa*

増 地 ひとみ

Hitomi MASUJI

キーワード：オノマトペ、ひらがなとカタカナ、文字種選択要因

### 1. 研究の背景と目的

現代日本語の文字言語においては、主に4種類の文字種—漢字・ひらがな・カタカナ・Alphabet—を使用する。ある語を書き表そうとするとき、4種類のうちどれを選ぶことも可能であるのに、1種類を選び取っている。例えば「マンガ」と書く人もいれば「漫画」「Manga」と書く人もいる。ある時に「漫画」と書いた同じ人が、「まんが」と書くこともあるかもしれない。なぜ、その文字種を選ぶのだろうか。そこには必ず理由がある。つまり、文字種が使い分けられる時には、背後に何らかの要因が働いているのである。筆者はこれまで、テレビ番組やテレビCM、日用品のパッケージ等に見られる文字情報を調査対象として、文字種が選択される際の要因（以下「文字種選択要因」）を探ってきた（増地 2013・2015a・2015b・2016・2018）。特に、外来語以外の語（非外来語）がカタカナで表記される現象に注目し、なぜそれらの語がカタカナで表記されるのかに焦点を当てて考察してきた。

カタカナで表記される非外来語の代表的な例の一つとして、オノマトペが挙げられる。擬音語や擬態語である。特に擬音語については、カタカナ表記された例が多く流通しているため、「カタカナで書くものである」という規範意識が働いてカタカナで表記されることも多いと考えられる。しかしながら、全ての擬音語がカタカナで書かれるわけではない。また、擬態語に関してはひらがな表記も多く流通している。オノマトペを表記するのに、ひらがなあるいはカタカナが選択されるにあたっては、どのような要因が背後に働いているのであろうか。

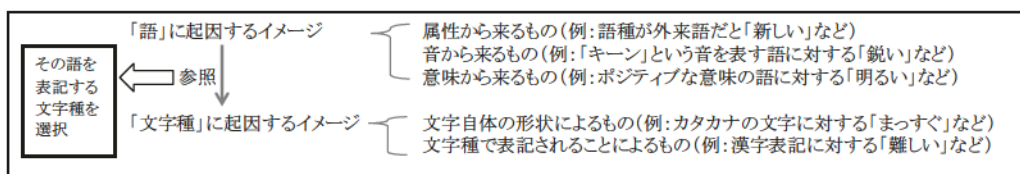
本稿では、《オノマトペを構成する音》と《文字種のイメージ》との関連から仮説を提示し、アンケート調査によってその仮説を検証する。その結果を踏まえて、現代日本語においてオノマトペを表記する時、何がひらがなとカタカナを選択する要因となっているのかを考察する。音やイメージという実体のないものを扱うため、調査に先立って理論的側面から音・イメージと文字との関連を確認し、その上で実証的な手法で検証するという手順にて稿を進める。

## 2. 文字種選択要因に関わるイメージ

文字種選択要因には、印象・イメージ（本稿では主に「イメージ」という表現を用いる）に関わってくる。以下に文字種選択要因に関わるイメージの諸相を整理して示す。

まず、文字種選択要因に関わるイメージは、図1に示したように「語」に起因するイメージと「文字種」に起因するイメージとに分類できる。「語」に起因するイメージには、語種など語の属性から来るイメージ、語の音（擬音語の元になる音や、擬音語以外の語を発音した時の音）から来るイメージ、語が示す意味から来るイメージがある。そして、「文字種」に起因するイメージとして、ひらがな・カタカナという文字自体の形状がもたらすイメージと、ある語がある文字種で表記されることによるイメージがある。笹原宏之（2011）が「字感」（p.216）「表記感」（p.61・p.216）と呼ぶ概念に、前者と後者はそれぞれ該当するであろう。まずはこれらのイメージを区別して捉えることにする。

表記者が表現したい事柄を言語化して文字で示そうとする時には、まず語を思い浮かべる。それぞれの語は、今述べたような様々なイメージを持っている。そこで、「語」に起因するイメージを具象化するにあたり、「文字種」に起因するイメージが表記者によって参照される。その後、最終的にその語を表記する文字種が選択されるまでの過程では様々な要因が関与するが、今述べた「語」と「文字種」のイメージも文字種選択要因の一つとなるものである。（図1）



【図1】文字種選択要因に関わるイメージ

ここで、図1の「音」の中でもオノマトペをめぐる「音」には2種類がある。一つは、何かの物音など、現象として発生した「音」である。もう一つは、現象として発生した音や、何かの状態を表すために使われる言葉・語としての「音」である。この後者の「音」のまとまりが、擬音語・擬態語と呼ばれるオノマトペである。本稿ではこの2種類の音を区別するため、現象として発生した音を「現象音」、語としてのオノマトペを構成する音を「描写音」と呼ぶことにする。現象としての音や状態を描写するのが描写音であり、描写音はオノマトペを発音する時の音に等しい。描写音を文字にしようとする際に日本語にはひらがなとカタカナという選択肢があり、表記者にそのいずれかを選ばせているのが本稿で言うところの文字種選択要因である。

## 3. オノマトペの表記

本章では議論の前提として、現代日本語において流通しているオノマトペの表記に関して確認し

ておく。現代における日本語使用者は、学校教育で使用した教科書や、新聞やテレビなどのマスメディアの文字情報を通して表記に対する感覚を形成していると考えられる。増地（2018）でも述べたように、マスメディアや教科書関連の出版社は独自の「表記の手引き」類を有し、そこにはオノマトペの表記に関する基準も示されている。例えば、以下のようである。

- ・松村明校閲・教育出版編集局編『表記の手引き』第七版 「片仮名の使い方」の項（p.240）  
擬声（音）語は片仮名で書き表し、動物の鳴き声や人間の泣き声・笑い声もここに含むとする。「擬態語は、平仮名で書くことを原則とし、擬声語の表記と区別する」との注意書きがある。
- ・NHK 放送文化研究所編『NHK 漢字表記辞典』「Ⅲ カタカナで書く語」の項（p.29）  
「カタカナ書きの慣用があるもの」はカタカナで書くとして、「擬音語」を挙げる。擬態語については言及がない。
- ・共同通信社編著『記者ハンドブック』第13版 「片仮名使用」の項（p.109）  
擬音語・擬声語は「なるべく片仮名で書くが、平仮名で書いてもよい」、擬態語は「平仮名で書く。ニュアンスを出したい場合は片仮名書きしてよいが、乱用しない」とする。

ここに挙げたのはわずかな例ではあるが、まとめると、擬音語・擬声語をカタカナで表記するという方向性は一致している。擬音語・擬声語にはカタカナが、擬態語についてはひらがなが新聞やテレビの文字情報で多く使用され、流通している状況と大まかには言えるであろう。

#### 4. 文字種の選択要因に関する先行研究と本稿の位置づけ

文字種の選択に関する先行研究は、表記のゆれの実態を調査し、その要因を考察することによって蓄積されてきた。「表記のゆれ」とは、冒頭に挙げた「まんが／マンガ／漫画／Manga」のように、同じ語が複数の異なる表記で書かれる現象である。代表的な研究成果は『現代表記のゆれ』（国立国語研究所 1983）であり、最近では笹原宏之（2013・2014）の論考がある。そして、文字種の中でも非外来語のカタカナ表記<sup>1)</sup>に焦点を当てた研究が数多くなされ、外来語ではないのにもかかわらず語がカタカナで表記される要因が明らかにされてきた<sup>2)</sup>。

それらの要因の一つに、本稿が「語」に起因するイメージ」として取り上げる「音」との関連がある。例えば「硬質系の音色」を表現するのに「カタカナの外見の持つ硬さ」が適していたなど（堀江紫野 2001、p.21）、音の性質と文字そのものが持つ形状とを結びつけ、それが非外来語がカタカナで表記される要因になるとの指摘がある。図1で示した、「語」に起因するイメージと合致するように文字種が選択される例である。また、カタカナが持つ表音性が、ある語がカタカナで書かれる要因となっているとの指摘は、複数の先行研究に見られる（武部良明 1991 pp.225-227、柴田真美 1998 p.56 ほか）。しかしながら、「カタカナが表音性を持つ」というのは日本語の歴史の流れの中でカタカナに恣意的に付与された文字種の役割によるものであり、同じく表音文字であるひらがなも表音性は持っている。そもそも、なぜ硬い音を表すのに直線的な文字、すなわちカタカナによる表記が選択されるのかという根本的な説明は、日本語学の分野における先行研究ではな



されていない。何となく感覚的に合点がいくため、それ以上掘り下げて検討されてこなかったものと思われる。

音を表すためのカタカナの選択は、ひらがなという文字が存在するために相対的に可能になる。もし日本語がひらがなしか持たないならば、ひらがなを選ぶしかない。しかし実際にはカタカナが存在し、カタカナのほうがふさわしいと何らかの理由で表記者が考え、選択した結果カタカナ表記が出現する。この「何らかの理由」が文字種選択要因である。

現代日本語においてカタカナが表音的に用いられる代表的な例が、オノマトペである。オノマトペに関する研究は多分野で盛んに行われており<sup>3)</sup>、日本語学においてもその表現性や意味、音構造など多様な切り口での研究が蓄積されてきた<sup>4)</sup>。しかし、オノマトペにおける文字種の選択を、音と文字種のイメージとの関連に着目して実証的に論じた研究は、筆者の知る限りまだ存在しない。

オノマトペが示す「状態」と文字種選択要因との関連に関しては、小松孝徳・中村聡史・鈴木正明(2014)がその可能性を指摘している。小松・中村・鈴木は「丸み度合値の高いひらがなは、やわらかい印象のオノマトペの表記に使われる」「丸み度合値の低いカタカナは、固い印象のオノマトペの表記に使われる」という仮説を提示している。つまり、オノマトペの印象、オノマトペが表現する「状態」と、そのオノマトペを書き表す文字種(ひらがな・カタカナ)の形状とが関連していることに着目している。小松・中村・鈴木による仮説の検証が待たれるところであるが、筆者が増地(2015a)で述べたとおり、カタカナをはじめ文字種が選択される要因は複合的、重層的であり、また各々の実例ごとに個別的である(p.70)。小松らによる仮説が立証されたとしても、それで全ての例の出現要因を説明することは困難であると考えられる。オノマトペにおいてどのようにひらがな・カタカナが選択されるのかを説明するには、さらに個別の例に基づいた、掘り下げた検討が必要であろう。

図1で示した今一つの文字種選択要因である「文字種」に起因するイメージ」もまた、多くの先行研究によって指摘されてきたものである。例えば、カタカナは直線的、ひらがなは曲線的(武部良明 1981, p.303)であるなどといった文字そのものの形状から来るイメージや、ひらがな表記はやわらかい(浮田潤他 1996, p.69)といった、ある文字種で表記されることによるイメージである。しかしながら、「そうしたイメージを持つ文字あるいは文字種による表記が、なぜその語を表記するために選択されたのか」という点については十分に説明されていない。本稿で扱う「音」との関わりについても、先にも述べたように例えば堀江(2001, p.21)は「カタカナの外見の持つ硬さが(中略)「硬質系の音色」なるものを表現するのに適していたのであろう」と分析しているが、なぜカタカナという文字の外見の硬さが硬質系の音色を表す語に結びついてカタカナ表記が選択されるのか、という点には踏み込んでいない。カタカナ表記とイメージの関係を論じた奥垣内健(2010)も、音との関係には着目していない。

以上を踏まえ、本稿ではオノマトペを題材に、オノマトペを発音する時の音である描写音が文字に置き換えられるにあたって、どのような要因が関与してひらがなあるいはカタカナが選択されているのかを検討する。以下、5章では「文字の形状」「音」それぞれのイメージに関して先行文献

の知見を参照しつつ整理し、「音」と文字種の選択に関する仮説を提示する。そして6章で、具体的な2つのオノマトペを選定し、それらの語に関して行なったアンケートの調査結果を用いて仮説を検証する。

## 5. 「文字の形状」「音」とイメージ—先行文献の知見を踏まえた仮説

### 5.1 文字の形状とイメージ

「ひらがなは曲線的、カタカナは直線的」というイメージに基づく言説は、日本語学の分野においてはほとんど常識のように語られている。しかし例えばひらがなの「へ」とカタカナの「ヘ」についてはどうであろうか。本節では、「ひらがなは曲線的、カタカナは直線的」というイメージと言説が妥当であるかどうかを確認する。

小松・中村・鈴木（2014）は、ひらがなとカタカナそれぞれ46文字の「丸さ度合を客観的に表現する手法」を提案し、「実際の手書き文字からひらがなおよびカタカナの丸さ度合値を算出する実験を行った」（p.2）。その結果、46文字中39文字において、「ひらがなの方がカタカナよりも丸さ度合値が有意に大きいことが確認された」とする。「し／シ」「せ／セ」「く／ク」の3文字では有意差ではなく有意傾向が観察され、そのうち「く／ク」ではカタカナの丸さ度合値の方がひらがなよりも大きい傾向があったという。そして、「け／ケ」「た／タ」「へ／ヘ」「り／リ」の4文字では有意差が確認されなかったとのことである。以上を踏まえ、ひらがなよりもカタカナの方が丸さ度合値が有意に大きい文字は存在していなかったとの結論を提示している（p.6）。小松・中村・鈴木の実験結果より、「ひらがなは曲線的、カタカナは直線的」というイメージと言説は、前提として妥当であると言える。

### 5.2 「音」に起因するイメージ

日本語の音（子音）が持つイメージを、金田一春彦（1988）は次のように表現している。

カ行音は、乾いた堅い感じ、サ行音は快い、時に湿った感じ、タ行音は強く、男性的な感じ、ナ行音はねばる感じ、ハ行音は軽く、抵抗感のない感じ、マ行音はまるく、女性的な感じ、ヤ行音はやわらかく、弱い感じ、ワ行音はもろく、こわれやすい感じがある。（p.131）

また、脳とことばを研究し、人工知能開発にも携わった黒川伊保子（2007）は、擬音語・擬態語に見出せる法則として、「Kには硬い固体感が、Sには空気を孕んですべる感じが、Tには粘性のある液体のイメージがある」と述べる（p.131）。また、Wは「外に向かって膨らむ意識を喚起する」という（p.137）。すなわち、例えばKの「音」は、硬い状態や本稿で言う現象音を表すオノマトペに用いられているということである。「音象徴語とも呼ばれる」とされたとおり（篠原和子 2015、p.44）、オノマトペにおける語の「音」、本稿で言う描写音は現象音を写し取るものであり、

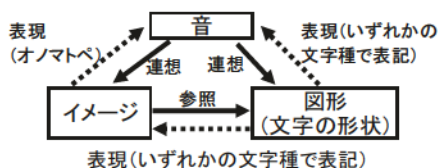
また、状態を象徴してもいる。「語を構成する音が、それ自体で（恣意的な約束事によらず）、なんらかのイメージを喚起する」（同、p.48）音象徴という現象によって生成されているのがオノマトペである。

以上をまとめると、例えばカ行音を描写音として持つオノマトペはかたいイメージを、マ行音やヤ行音、ワ行音を描写音として持つオノマトペはまるくやわらかいイメージを、その語の描写音を聞いた受け手に想起させると言えそうである。

さらに、音と図形を関連づける脳の感覚的な働きについての報告もある。「ブーバ (booba)・キキ (kiki) 効果」と呼ばれるものである。神経科学者の V. S. ラマチャンドラン (2005) によれば、脳にはある種の「音」にある種の視覚的形態を体系的にマップする働きがある。その表れとして、被験者に丸い曲線とギザギザの直線とからなる2つの図形<sup>5)</sup>を見せ、「どちらか一方がブーバで、もう一方がキキであるが、どちらがどの名だと思うか」と問うと、98%の人が「曲線のほうがブーバで、ギザギザのほうがキキだ」と答える。そして、この結果は母語にほとんど関係がないという。これは人間の脳が持つ共感覚という感覚作用によるもので、ギザギザの図形と「キキ」という音のあいだから「脳は、共通項を、すなわち「ぎざぎざ」という属性を抽出」するのだという (pp.110-117)。このラマチャンドランらによる「ブーバ」「キキ」の実験結果に関しては篠原和子 (2015) でも言及されており、「[b]や[u]は膨張した丸い視覚的表象とむすびつき、[k]や[i]は直線的で鋭い視覚的表象とむすびつく傾向が強い」と言う (pp.48-49)。また、同様の研究が小松・中村・鈴木 (2014) でも引用されて紹介されている。「takete」と「maluma」という無意味語を用いた実験でも、上記「ブーバ」「キキ」の場合同様、「takete」と角ばった図形、「maluma」と丸い方の図形の結びつきが見られたという (p.6)<sup>6)</sup>。

以上のように、人間は音から特定のイメージを連想し、また、音から特定の図形を連想することがあるということである。5.1で確認した「ひらがなは曲線的、カタカナは直線的」という前提に立てば、ラマチャンドランが提示した曲線と直線からなる2つの図形はひらがなとカタカナに対応する。そうであるならば、日本語使用者がオノマトペを表記する時には、特別な表現意図がないかぎり、《音》と《音によって想起されるイメージ》に対応する文字種を選択する可能性が高いのではない。つまり、現象音や描写音、またそれらによるイメージと、文字種の形状とを照らし合わせ、元の音やイメージにできるだけ合致した形状を持つ文字種によって描写（語を表記）するというのである。(図2)

なお、本節冒頭の子音に関する記述に加えて、金田一春彦 (1988) は母音についても次のように述べている。(pp.130-131)



【図2】音とイメージと図形

仏文学者の太宰施門は、日本語の母音を比較して、その感じを、

アは高く大きく、イは細く鋭く、ウは暗く鈍く、エは明るく平たく、オは円くて重い。



と言っていたそうだ（榎垣実『日英比較表現論』）。これは、多くの人の共感を得そうだ。

金田一の子音と母音に関する記述を統合すると、カ行音で「イ」を母音として持つ「キキ (kiki)」という音から、日本語使用者は鋭くかたいイメージを受けると見なしてよいであろう。本節冒頭に示した金田一（1988）からの引用部分には、「ブーバ (booba)」の「ブ」が属するバ行音についての言及はないものの、母音の「ウ」は上記のように「暗く鈍く」とある。日本語使用者にとって、「キキ」は鋭く、「ブーバ」は「鈍い」イメージの音なのであろう。

### 5.3 仮説

以上のことから、「ブーバ・キキ効果」に言う音と図形の対応関係が、日本語の現象音・描写音とひらがな・カタカナとの対応関係に当てはまるとするならば、以下の仮説が成り立つ。

- A. 「ブーバ」と類似の現象音または描写音を持つ語は、ひらがなで書かれやすい。
- B. 「キキ」と類似の現象音または描写音を持つ語は、カタカナで書かれやすい。

以下ではこの仮説を検証し、音とそれを表記する文字種の対応関係、つまり音とそれを表記するひらがな・カタカナの対応関係が認められるかどうかを検討する。対応関係が認められるならば、特にオノマトペの表記においては、音（現象音あるいは描写音）が文字種選択要因の一つとなる場合があると見ることができる。

## 6. 仮説の検証

### 6.1 方法

上記の仮説を検証するため、アンケート調査を行う。「ブーバ」「キキ」と類似の描写音を持つオノマトペを選定し、調査協力者にそれらのオノマトペを表記してもらう。そして、オノマトペの描写音とそれらが表記された文字種（ひらがな・カタカナ）との対応を見る。

### 6.2 調査対象とする語の選定

『日本語オノマトペ辞典』（小野正弘編 2007）を参照したところ、「キキ」は記載されていたが、「ブーバ」は記載されていなかった。そこで「ブーバ」については、同辞典に掲載された語のうち「ブーバ」と類似の音を持つ語から調査対象とする語を選定することにした。併せて「キキ」についても、類似の音を持つ語の中から日本語のオノマトペとしてなじみの深いものを選定することにした。

「ブーバ (booba)」は[b]、「キキ (kiki)」は[k]を子音として持つ。音声学的な分類では、[b] [k]ともに調音方法は「破裂音」であり、[b]は有声、[k]は無声である。調音位置は[b]が「両唇音」、[k]が「軟口蓋音」である。また、「ブーバ (booba)」が持つ母音は日本語で考えれば「ウ」と「ア」、「キキ (kiki)」は「イ」である。「ウ」は張唇奥舌狭母音、「ア」は中舌広母音、「イ」は張唇前舌狭母音である（馬淵和夫 1971、pp.16-17）。

「ブーバ」の[b]と同じ両唇音には[p][Φ][w][m]がある。これらの子音として持ち、母音が「ア」または「ウ」であるものを「ブーバ」[bu:ba]と類似の音を持つ語と見なして抽出すると、まず「ふわふわ」[ΦuwaΦuwa]がある。ほかには「ぶわぶわ」[buwabuwa]「ぶー」[bu:]「ぶーぶー」[bu:bu:]「ぶーぶー」[pu:pu:]も類似の音を持つオノマトペであると言える。

「キキ」[kiki]と類似の語については、『日本語オノマトペ辞典』では「きーきー」[ki:ki:]「きんきん」[kiNkiN]「きーっ」[ki:ʔ]「きーん」[ki:N]などが見られた。また、「キキ」の子音[k]と同じ「軟口蓋音」には[g]がある。これを子音として持ち、母音が「イ」であるものを「キキ」と類似の音を持つ語として見なすなら、「ぎぎ」[gigi]「ぎーぎー」[gi:gi:]も該当する。

以上の語の中から、本稿では「ブーバ」「キキ」の各々と類似した音を持つ語として「ふわふわ」と「きんきん」を調査対象とする。この2語を選んだ理由は、次のとおりである。先に類似の音を持つと見なして抽出した語の中で、「ふわふわ」と「きんきん」はいずれも長音符号を含まず、擬態語として使われ、なじみのあるオノマトペであるという共通点を属性として持つ。もし今述べた属性が異なると、ひらがな・カタカナの選択に影響を及ぼす可能性が高い。そのため、文字種の選択を左右する要素として音以外の条件が関与することは極力避けた。

以上を踏まえ、調査対象の語を補った上で仮説を再提示する。

- a. 「ブーバ」と類似の描写音を持つ「ふわふわ」は、ひらがなで書かれやすい。
- b. 「キキ」と類似の描写音を持つ「きんきん」は、カタカナで書かれやすい。

### 6.3 調査の概要

調査協力者は本学学生 78 人、調査の実施時期は 2018 年 7 月～9 月である<sup>7)</sup>。手書きで回答するアンケート調査の中の一項目<sup>8)</sup>として、以下の質問を提示した。

Q 11. 感じたとおり、自由に文字にしてください。漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベットのどれを使っても構いません。読点「、」は、入れても入れなくても、また、いくつ入れても構いません。

①かんばいは きんきんの びーるで やりたい。<sup>9)</sup>

②ひとくち たべたら なかは ふわふわの くりーむだった。

続いて別の質問 2 問への回答を求めた後、以下の質問を提示した。空行は削除して示す。

Q 14. 3 問前 (Q 11) の、あなたの回答①と②を見てください。

Q 14-1. ①の「きんきん」はひらがなとカタカナのどちらで書きましたか。○をつけてください。

ひらがなで書いた

カタカナで書いた

Q 14-2. それは、なぜですか。無意識にそちらを選んだのだとしたら、それはなぜだと思えますか。どんなことでも結構ですので、自由にお書きください。

(以下、自由回答欄)

続く Q 15 では、Q 14 と同様に「ふわふわ」についても尋ねた。(設問文は Q 14-1・2 と同じ)



質問 11 (Q 11) の設問文①②を作成するにあたっては、先行研究で指摘されてきた文字種選択要因の影響を極力排除するため、①②において「きんきん」「ふわふわ」(以下、まとめて述べる時は「調査語」と言う)双方の語が置かれた条件が揃うようにした。具体的には以下のとおりである。

- ・調査語がいずれも飲食物の状態を表す擬態語として解釈されるように、語単体で提示するのではなく、文章の一部とした。「きんきん」「ふわふわ」ともに精神状態や性格等を表す場合もあるため、解釈にぶれが出るのを防ぐためである。また、「きんきん」は単独で提示すると擬音語と解釈される可能性もあり、擬態語と解釈された場合よりもカタカナで表記される可能性が高いためである。
- ・調査語の近くに、通常カタカナで書かれる外来語を配した。近くにカタカナで書かれた語があると、その影響で別の語がカタカナで書かれる場合もあることが先行研究で指摘されている。本調査では、①②ともに調査語と続く節に外来語を配し、同条件とした。
- ・調査語の前後の文字がひらがなになるようにした。語が前後をどの文字種で挟まれているかという文字列環境(増地 2015a)は、文字種の選択に影響を及ぼす要因の一つである。例えば、前後をひらがなで挟まれている場合、ひらがなが続いて読みにくくなるのを避けるためにカタカナを選択するなどである。そこで、①②の調査語の前後にひらがなを配して、同条件とした。

## 6.4 調査結果

### 6.4.1 質問 11 の集計結果

まず、質問 11 の集計結果を示す。①②の調査文における調査語「きんきん」と「ふわふわ」をひらがな・カタカナで表記した人数は、各々表 1 のとおりであった。

「きんきん」では 92.3%が「キンキン」とカタカナで表記し、「ふわふわ」では 83.3%がひらがなで「ふわふわ」と表記した。仮説 a・b はいずれも支持され、「ふわふわ」は「ふわふわ」とひらがなで書かれやすく、「きんきん」は「キンキン」とカタカナで書かれやすい。そして 5 章までの検討により、「ふわふわ」をひらがな、「キンキン」をカタカナで表記するという文字種の選択は、オノマトペとしての「ふわふわ」[ΦuwaΦuwa]「きんきん」[kiNkiN]という描写音の影響によるもの、つまり音が要因の一つとなってなされたものであり、特に「キンキン」においてその傾向が強いと結論づけられる。<sup>10)</sup>

【表 1】「きんきん」「ふわふわ」の表記

①きんきん			②ふわふわ		
	回答者数	割合		回答者数	割合
きんきん	6	7.7%	ふわふわ	65	83.3%
キンキン	72	92.3%	フワフワ	13	16.7%
計	78		計	78	

### 6.4.2 質問 14・15 の自由回答欄における記述

それでは、表記者である調査協力者自身の認識はどのようなであろうか。「キンキン」「きんきん」、「ふわふわ」「フワフワ」それぞれの表記者の自由回答欄における記述を見ていく。なぜその文字種で表記したのかを問う設問(Q14-2、Q15-2)への、回答内容である。自由回答欄に書かれた「その文字種で表記した理由」を内容ごとに分割してラベルを付し、分類した結果を表 2～5 に示す。

1名が複数の理由を挙げている場合もあるため、人数はのべ人数である。

まず、仮説どおりの選択をした「キンキン」(表2)と「ふわふわ」(表3)の表記者がその文字種を選択した理由に関して、自由回答の記述も抜粋しながら概観する。以下、回答者による記述は〈〉でくくり、原文のまま引用する。

「キンキン」「ふわふわ」いずれにおいても、文字種や語のイメージと合致しているためその表記を選んだという回答が多い。〈カタカナの方が冷えている印象だから〉〈カタカナの方が硬い、鋭いイメージがあるので意識的に〉〈ひらがなの方が丸くてやわらかいイメージ〉といった「文字種のイメージ」に関する記述をした回答者は、「キンキン」で50名、「ふわふわ」で53名であった。また、〈きんきん=とがっているというようなイメージがあるから〉〈やわらかでふわふわのイメージに合っている気がしたから〉など、「語のイメージ」に関する記述は「キンキン」で9名、「ふわふわ」で8名見られた。〈見た目が角ばっているカタカナの方が冷たさを表現できると思ったから〉〈ひらがなは丸みを帯びているので柔らかい感じが伝わるといった〉等、「文字種の形状」を理由とする回答も「キンキン」で6名、「ふわふわ」で11名に見られた。

「なじみ(接触)」は、その表記をよく見るという理由に基づく回答である。「キンキン」で6名見られた。「読みやすさ」を挙げた回答者が「キンキン」「ふわふわ」で2名ずつ存在したが、「キンキン」の場合はひらがなだとひらがなが続いて読みにくいため避けて「キンキン」にしたとの回答であり、「ふわふわ」の場合はカタカナだと「フ」と「ワ」が似ていて読みづらいとの回答内容であった。

「ふわふわ」には見られず「キンキン」のみで見られた回答内容としては、「キンキンという音が固そう」というように直接的に「音」に言及するものも1件あった。また、「カタカナ表記規範感覚」に基づく理由を挙げた回答者が10名いた。これは、〈擬態語だから〉〈オノマトペはカタカナというイメージがあるから〉等、オノマトペを表記するならカタカナが規範的であるという、文字種の使い分けに関する知識に基づく選択理由である。「ふわふわ」表記者においては、その表記が規範的であることを理由とした回答が皆無であるのと対照的である。

次に、仮説と異なる選択をした「きんきん」(表4)と「フワフワ」(表5)表記者の回答内容に関して見ていく。

「きんきん」と表記した回答者6名のうち、2名はひらがなの方が書きやすいという「筆記の効率性」の側面

【表2】「キンキン」と表記した理由

	人数
文字種のイメージ	50
カタカナ表記規範感覚	10
語のイメージ	9
なじみ(接触)	6
文字種の形状	6
表現効果	3
読みやすさ	2
音	1
文脈(近くにカタカナで書かれた語がある)	1
何となく	1
計	89

【表3】「ふわふわ」と表記した理由

	人数
文字種のイメージ	53
文字種の形状	11
語のイメージ	8
読みやすさ	2
なじみ(接触)	1
表現効果	1
何となく	1
計	77

【表4】「きんきん」と表記した理由

	人数
筆記の効率性	2
語のイメージ	1
文字種の形状	1
規範意識	1
表記習慣	1
計	6

を理由としていた。「語のイメージ」1名の回答内容は、〈「キンキン」だと突き刺すようなつめたさを感じる。程良く気持ちいいつめたさをイメージしていたので、ひらがなにした〉というものである。「文字種の形状」の1名は〈字の形（見た目）〉が理由であるとする回答、「規範意識」の1名は〈擬音語は日本語のイメージがあるから〉、「表記習慣」の1名は〈キンキンの方が冷えて

いる感じがあるけど、普段からあまりカタカナを使わないので、ひらがなにしたのだと思います〉という回答である。

「フワフワ」と表記した理由は、のべ14名分抽出された。うち5名が「なじみ（接触）」、つまり「フワフワ」というカタカナ表記をよく見ることを理由として挙げた。「文字種のイメージ」3名の回答は、各々次のようであった。

- ・〈カタカナのほうが身近なので、フワフワ感がより伝わりやすいかなと思ったから〉
- ・〈フワフワの方がひらがなよりもふわふわしてそうだから〉
- ・〈カタカナにしたのは、状態を表しているのが伝わりやすいと思ったからだと思う〉

最後の回答者は、〈カタカナで書いたがひらがなの方が適切な気がしてきた。「ふわふわ」の方が「ふわふわ」してるのがイメージしやすい。〉とも記述していた。

続く「カタカナ表記規範感覚」2名が挙げた回答内容は、「キンキン」同様に〈擬音語だから〉というものであった。すなわち知識に基づく理由である。「表記習慣」の1名は〈カタカナをおぼえた時から「ふわふわ」はカタカナで書いている〉、「表現効果」の1名は〈やわらかさがより伝わるから〉、「文脈」の1名は〈クリームをカタカナにしたことから。それと揃えてカタカナで書いた〉を、それぞれ「フワフワ」とカタカナ表記した理由として挙げていた。「読みやすさ」の1名は〈ふわふわとかくと前後のひらがなといっしょになってしまいわかりづらいから〉と記述しており、「文字列環境」（増地 2015a）が要因となって文字種が選択された例である。

仮説と異なる選択をした「きんきん」「フワフワ」の表記者が挙げた理由は、以上見てきたように、相互にほとんど重なり合っていない。つまり「きんきん」と「フワフワ」はそれぞれ、別の要因によって文字種が選択され、現れた表記である。

## 7. 考察

以上の結果からは、本稿が目指してきた「語」や「文字種」に関わるイメージが、語を表記するための文字種の選択に影響を及ぼしているのが明らかである。「文字種の形状」も含めイメージとの合致を挙げる回答が多いのは、図2に示したとおり、現象音や描写音、またそれらによるイメージと、文字の形状とを照らし合わせ、元の音やイメージに合致した形状を持つ文字種によって語を表記した結果であろう。この文字種選択までのプロセスは、表記者自身によって意識されている場

【表5】「フワフワ」と表記した理由

	人数
なじみ(接触)	5
文字種のイメージ	3
カタカナ表記規範感覚	2
表記習慣	1
表現効果	1
文脈(近くにカタカナで書かれた語がある)	1
読みやすさ	1
計	14



合もあれば、〈何となく〉という回答や〈…と思ったからだと思う〉等の回答も見られるとおり、表記者が無意識にその表記を選択している場合もある。本稿の目的は、現代日本語においてオノマトペを表記する時、何がひらがなとカタカナを選択する要因となっているのかを考察することであったが、この問いに対して本稿ではまず、オノマトペ「きんきん」と「ふわふわ」については描写音が主要な文字種選択要因となっているという結論を提示する。それが「キンキン」にはカタカナが、「ふわふわ」にはひらがなが選択されやすいという現象につながっている。背後にあるのは、感覚的に受け取った音やイメージを文字種を使い分けることでより正確に具象化し、再現しようとする、表記者の意識あるいは無意識の働き（共感覚の作用）である。音を起点とするイメージ・形の相互関連がオノマトペ全般における文字種選択要因となっている可能性が示唆される。

「キンキン」表記者の回答には、カタカナを選択した理由として、冷たさを表現できる点を挙げたものが多かった。6.4.2 で提示した例を含め、「キンキン」というカタカナ表記と「冷たさ」を関連づけた自由回答の記述はのべ54名で見られた。本来、カタカナの形状と「冷たさ」には直接的な関係はない。つまりこれらの記述は、5.2 で引用した共感覚が、文字種の選択にあたって確かに作用していることを裏づけるものである。

また、「きんきん／キンキン」という語を「トゲトゲした印象」と関連づけた記述が6名に見られた。これらの6件の回答はいずれも、「キンキン」という「音」ととがった印象との結びつきには言及していなかった。つまり音と形状の関連性は、回答者（表記者）において意識化されていない。表2で示したように、自由回答の記述において音に言及した表記者は別の1名のみであった。しかし、表記者自身が意識していなくても、「表記者が意識できる意識」のさらに深層で感覚的な要素が作用しているというのが、本稿が先行研究の知見をもとに5章で述べたことである。つまり、無意識では音の影響によって「キンキン」あるいは「ふわふわ」と表記していたとしても、表記者自身が内省すると、主観的には他の要因が認識されたということである。本稿で引用した文献が述べるように音が文字の形を想起させており、それにもかかわらず本稿の調査結果が示すように表記者本人にそれが認識されていないのだとすれば、それだけ「音」は人間の先天的な感覚に基づく、無意識の領域が司る文字種の選択要因なのであろう。

一方で、自由回答の記述からは、音やそこから連想されるイメージや図形（文字種）の対応とは一線を画する、次元の異なる要因が、オノマトペの文字種の選択にあたっては関与している様相が見て取れた。つまり、5章で述べたような先天的で感覚的な要素以上に優勢となって、表記者にいずれかの文字種を選択させる要素である。それは「キンキン」ではなく「きんきん」、「ふわふわ」ではなく「フワフワ」と表記する理由に顕著に表れている。例えば、その表記を見慣れているという接触頻度の高さや、筆記の効率性（書きやすさ）を追求する意識である。また、「その文字種で書くものである」という表記に対する規範意識や、習慣や、読みやすさを考慮する意識である。これらは後天的な要素である。後天的で理論的、とでも言えるであろうか。

以上を踏まえると、オノマトペを表記する文字種が選択される時、その要因は3層構造を成している（図3）。先天的・感覚的要素の中でも表記者の無意識のレベルで作用するもの（①）、同じ

く先天的・感覚的要素の中でも表記者が内省すれば認識できるもの(②)、そして後天的で理論的な要素、つまり後から獲得される要素である。各層における要素のいずれがどの程度強く作用するかは、出現例ごとに異なる。例えば同じく「キンキン」と表記されていても、その表記

③後天的・理論的要素 接触頻度、筆記の効率性、規範意識、習慣、読みやすさを考慮する意識など	後天的要素
②先天的・感覚的要素 (表記者が内省によって意識できる領域) イメージと図形(文字種)との関連づけ	先天的要素
①先天的・感覚的要素 (無意識の領域) 共感覚、音とイメージ・図形(文字種)との関連づけ	

【図3】オノマトペにおける文字種選択要因

が出現した背景は各々の出現例ごとに異なるわけである。これはオノマトペ全般に適用できる、文字種選択要因の基本的な構造であると考えられる。

「きんきん」表記者の回答内容には、「キンキン」だと突き刺すようなつめたさを感じる。程良く気持ちいいつめたさをイメージしていたので、ひらがなにした」というものがあった。ここからは、自分のいだいたイメージにできるだけ合致した表現を、文字種を使い分けることで追求しようとする表記者の意識が垣間見える。また、この回答者は「キンキン」と「きんきん」では表現される冷たさの程度が異なると捉えている。「キンキン」と「きんきん」における「表記感」(笹原2011)の違いをはからずも浮き彫りにした回答であると言えるが、いずれにしてもこのような回答内容からは、先天的で感覚的な要素よりも表記者の「表現しようとする意志」が優勢であるという、文字種選択の背後にある要因とメカニズムを推し測ることができる。

## 8. おわりに

本稿の目的は、オノマトペを表記する時に何がひらがなとカタカナを選択する要因となっているのかを考察することであった。その問いに対し、オノマトペ全般に適用できる文字種選択要因として、先天的・感覚的な要素と、後天的・理論的な要素とを指摘した。また、先天的・感覚的な要素には、無意識が司るものと、表記者が内省によって意識できるものがあり、オノマトペにおける文字種の選択要因は3層構造になっていることを述べた。「きんきん」と「ふわふわ」の2語を取り上げ、これらの2語が文字で表記される時には、音が主要な文字種選択要因になっていることを示した。

本稿が扱ったのは、オノマトペの中でも特定の2つの語のみである。本稿で提示した仮説もその実証結果も、オノマトペ全体にそのまま当てはまるものではない。本稿で述べた先天的・感覚的な要素の作用の仕方も、語ごとに異なるはずである。本稿はあくまで、オノマトペにおける文字種の選択要因が3層構造になっているという大枠を提示したにすぎない。各々の層においてどのような要素が文字種の選択要因となっているのかを、一つひとつのオノマトペに関して明らかにしていく必要がある。

本稿の調査における自由回答の記述には、現代における日本語使用者の表記意識が表れている。そこにはオノマトペの「きんきん」「ふわふわ」のみに当てはまるもののほか、オノマトペ全体に

当てはまるもの、さらには語全体に当てはまるものが混在している。これらを区別することは、オノマトペを表現する文字種の選択要因を解明するための一助となると考えている。アンケート調査に基づくデータを増やすとともに、自由記述の精査に取り組んでいきたい。

## 注

- 1) 先行研究では「非標準的なカタカナ表記」「非外来語のカタカナ表記」等の術語が用いられていた。本稿では「非外来語のカタカナ表記」を用いる。
- 2) 非外来語のカタカナ表記に関する先行研究については増地(2013・2015a・2015b)で述べた。
- 3) 篠原和子(2015)では、「人類学、心理学、認知科学、工学、スポーツ科学、医学、文学、芸術、マンガ学、また広告や商品開発との連携など、オノマトペに注目する分野は広範囲に及ぶようになってきた」と述べられている(p.44)。
- 4) 2015年発行の『日本語学』34(11)では、「オノマトペ研究の最前線」という特集が組まれていた。近年刊行された書籍には、窪田晴夫(2017)『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』、中里理子(2017)『オノマトペの語義変化研究』がある。
- 5) これら2種類の図形は、インターネットで「プーバ・キキ効果」を検索語として検索すると、いくつか例を参照することができる。
- 6) この takete と maluma については川原繁人(2015)でも「阻害音」「共鳴音」という観点から述べられている。「マルマ」の子音はすべて共鳴音、「タケテ」の子音はすべて阻害音であり、共鳴音は丸いイメージを、阻害音は角ばったイメージをもたらすという。(p.16)
- 7) 本調査は、愛知淑徳大学人間情報学部倫理審査委員会の承認(2018年7月5日付、2018-007)を受けて実施した。謝礼として図書カードで500円を支払った。
- 8) 本アンケートにおけるその他の調査結果については、稿を改めて述べる。
- 9) 当初は「びーるを きんきんに ひやして かんぱいを した。」という文を提示して調査を行っていた。しかし、回答者が「きんきん」というオノマトペではなく「ひやして」という語から冷えたイメージを想起してしまうことが懸念されたため、提示する文を変更した。その後、ここで提示した①を使用して調査を継続したが、「ひやして」という語が提示文に含まれていなくても回答者は「冷えた」「冷たい」などのイメージを「きんきん」という語から想起することがわかった。これについては、稿を改めて述べたい。本稿では、修正前と修正後の提示文双方における回答をまとめて扱っていることを断っておく。
- 10) 社会人17名に対しても同じ調査を行ったところ、「キンキン」と表記した回答者が16名(94.1%)、「ふわふわ」と表記した回答者が14名(82.4%)であった。大学生における結果とほぼ同じ割合である。年齢や経験はこれら2語における文字種の選択に影響を与えないと言えるであろう。社会人を対象とした調査については、データを増やした上で改めて報告したい。

## 文献

- 浮田潤他(1996)『日本語の表記形態に関する心理学的研究』日本心理学会モノグラフ委員会  
NHK放送文化研究所編(2011)『NHK漢字表記辞典』NHK出版  
奥垣内健(2010)「カタカナ表記語の意味についての一考察—身体性とイメージの観点から」『言語科学論集』16、pp.79-92



- 小野正弘編（2007）『日本語オノマトペ辞典—擬音語・擬態語 4500』小学館
- 川原繁人（2015）『音とことばのふしぎな世界—メイド声から英語の達人まで』岩波書店
- 共同通信社編著（2017）『記者ハンドブック』第13版、共同通信社
- 金田一春彦（1988）『日本語 新版（上）』岩波書店
- 窪蘭晴夫（2017）『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』岩波書店
- 黒川伊保子（2007）『日本語はなぜ美しいのか』集英社
- 国立国語研究所（1983）『現代表記のゆれ』国立国語研究所報告 75 国立国語研究所
- 小松孝徳・中村聡史・鈴木正明（2014）「「ひらがなはカタカナよりも丸っこいよね？」—文字の  
数式表現および曲率の利用可能性—」『情報処理学会研究報告 HCI、ヒューマンコンピュータ  
インタラクション研究会報告』2014-HCI-159（7）、pp.1-9
- 笹原宏之（2011）『漢字の現在—リアルな文字生活と日本語』三省堂
- 笹原宏之（2013）「漢語表記のゆれ」野村雅昭編『現代日本漢語の探究』pp.261-287、東京堂出版
- 笹原宏之（2014）「日本における漢字に対する加工とその背景」『HUMAN』7、pp.58-65、平凡社
- 篠原和子（2015）「オノマトペと認知科学—実験をもちいた音象徴の基礎研究」『日本語学』34（11）、  
pp.44-54、明治書院
- 柴田真美（1998）「現代のカタカナ表記について」『学習院大学国語国文学会誌』17、pp.12-20
- 武部良明（1981）『日本語表記法の課題』三省堂
- 武部良明（1991）『文字表記と日本語教育』凡人社
- 中里理子（2017）『オノマトペの語義変化研究』勉誠出版
- 堀江紫野（2001）「カタカナ表記の研究—非外来語系を中心に—」『国文目白』40、pp.16-24
- 増地ひとみ（2013）「テレビ番組の文字情報における文字種の選択—番組のジャンルと語用論的要  
素に注目して—」『早稲田日本語研究』22、pp.24-35
- 増地ひとみ（2015a）「テレビ番組の文字情報における非標準的なカタカナ表記—「文字列への埋  
没回避」の観点から—」『国文学研究』176、pp.82-67
- 増地ひとみ（2015b）「テレビCMの文字情報における文字種の選択—CMのジャンルと語用論的  
要素に注目して—」『早稲田日本語研究』24、pp.13-24
- 増地ひとみ（2016）「日用品のパッケージにおける非標準的なカタカナ表記—表記の「流通」を中  
心に—」『早稲田日本語研究』25、pp.1-14
- 増地ひとみ（2018）「学術雑誌におけるカタカナの役割と使用実態—カタカナ表記で出現する語と  
コンテキストとの関連—」『国文学研究』184、pp.105-91
- 松村明校閲・教育出版編集局編（2017）『表記の手引き』第七版、教育出版
- 馬淵和夫（1971）『国語音韻論』笠間書院
- ラマチャンドラン、V. S. (Ramachandran, V.S.)（2005）『脳のなかの幽霊、ふたたび—見えてきた  
心のしくみ』山下篤子訳、角川書店

## 付記

本研究は、愛知淑徳大学平成30年度研究助成を受けて実施した「非外来語のカタカナ表記に関する意識調査」（特定課題研究18TT31）の成果の一部である。